



きつねの復活

俊徳丸が住職をしているお寺では、境内にお祀りされている稲荷社の大祭「きつね稚児」が毎年5月の「母の日」に行われます。始めて二十数年になります。

今年、コロナの影響で四年ぶりに復活します。上の写真は以前、当寺のホームページに掲載された写真です。「稚児ちゃんの後姿がたまらなくかわ



いい〜！」と評判になりました。それ以来、ご両親がこの写真のように当日お子さんを並べて後姿の写真を撮影している光景をよく見るようになりました。

それまで私は神事など行った経験などありませんでしたので、最初はもちろん現在に至るまで試行錯誤の積み重ねです。御祈禱をされている住職さんや知り合いの神主さんにやり方などを教えていただきました。最後など妻と豊川稲荷へ行き、御祈禱を申し込みその様子を伺いに行きました。偵察です。

そうこうして準備をしていましたら友人である住職さんが、うちのお寺で今は使っていない太鼓

があるからと、大きくて立派な太鼓を譲り受けました。皮を張り替えたり修理をして、大祭までに般若心経が叩けるように必死で練習しました。その時、お稲荷さまが「やれ！」と背中を押してくださっていると感じました。こうして「きつね稚児」が始まりました。

それから三年、「きつねの花嫁花婿」と、その嫁入り道具を担ぐ「胴荷きつね(大人10名)」が加わりました。「胴荷きつね」は私が命名しました。胴荷(どうにかなんとって生きましょう。)という願いが込められています。



「きつねの花嫁花婿」は、ご夫婦、知らない者同士、カップルなどさまざまな人が役をつとめてくださいました。

実は、当町内会の訶梨帝母さんに花嫁をしていただきました。婿役は私の長男の小学校の担任の先生。「40歳を迎えるにあたり、もう結婚はいたしませんので、花嫁姿を母に見せたいのですが…」と言われたことを覚えています。しかし、その後まもなく年下のイケメンの方と結婚され、お子さんも誕生しました。お稲荷さんのご利益は時としてご自身が思い描いていた人生とは全く違う方向へ向けられてしまうことがあります。こうしてキツネにつままれたような人生を歩んでいらっしゃる訶梨帝母さんなのです。

きつね稚児、今年は5月14日です。 俊徳丸